

今年度も、SAHの一環として本校の図書委員がBook Fesを開催してくれました。また、図書館の工夫も素晴らしく、廊下から見える風景や季節毎に変化する展示ケース内の色合い等、ワクワクするような仕掛けが施されています。ある、来校された方が「前南の図書館は入ってみたいくなる図書館だ」と話をしていましたが、これほどまで工夫をされた図書館は県内でも珍しいと思います。

昨年度はこの「シリーズ随想」で高校生の時の図書館について書かせてもらいましたので、今回は大学生の時の図書館について書きたいと思います。私が通っていた大学では、当時キャンパス内の三カ所に図書館があり、大学の「ご自慢の」施設だったと思います。中でも、一番大きい中央図書館はその前にある広場から眺める風景がパンフレット等でも良く紹介される施設でした。この大学がモデルとなっていると言われる小説に、松村栄子さんの「至高聖所 アバトーン」があります。この作品の中で、中央図書館は「その迫り出した中央の入り口に至るにはごく緩やかな階段を四、五段昇らなければならず、昇った先のファサードに立ち並んだ大理石の円柱が六本、広場を睥睨しているさまには格調までがあった。」と書かれており、小説の中でも鍵となる扱いをされていました。確かに、建物の中に入ると特別感がありました。

さて、大学の1、2年生の時、私は学生宿舎と言われるキャンパス内の個室に住んでいました。とても狭い部屋でした。エアコンはありませんから、夏は暑く、部屋にいるときは窓も扉も全開でした。冬は夜の十時まで建物全体に高温のお湯を流す、全館暖房があったのですが、流れが悪いのか、部屋の暖房機から「ピーッ」という高音が鳴り響き、とても部屋にいられるものではありませんでした。こんな状況の中、夏は涼、冬は暖を求め図書館に逃げ込んでいました。当時は夜の十時まで開館していましたので、安心して過ごすことができました。自然科学のフロアで過ごすことが多かったのですが、専門書の量に圧倒されました。まさに知の宝庫でした。その場にいるだけで何かアカデミックな気持ちになりました。私は数学専攻を希望していたのですが、優秀な学生では無かったので、単位取得には苦労しました。それでも図書館で勉強していると落ち着いて取り組むことができ、自分の思考の中に沈み込んでいくような感覚を感じることがありました。図書館という場所だからこその感覚だと思います。今年の夏に久しぶりに大学を訪れたのですが、図書館は若干の変化はありつつも、存在感を示していました。(学生宿舎は閉鎖されていました。)

大学四年生の夏には教員採用試験に向け、図書館で勉強をしていました。当時はバブルの真っ最中でしたので、企業への就職を希望する友人達はどんどん内定を取ってきており、その中で採用試験の勉強を続けることにうんざりしていました。その時、ある友人が持ってきたのが、俵万智さんのサラダ記念日でした。当時の帯には「与謝野晶子以来の大型新人類歌人誕生」と紹介されています。自分と年齢の近い、大学を出たての県立高校の先生が世の中をひっくり返すほどの歌集を出版したという事実にはたいへんな衝撃を受けました。急にやる気が出たような高揚感を感じたことを覚えています。結局この年、私は教員採用試験にも落ち、急なやる気だけではどうにもならないことを思い知らされます。サラダ記念日は教科書にも掲載されたりしますので読んだ人も多いと思います。まだ、読んだことのない人は手に取ってみてください。